



Design

～地域包括ケア病棟から地域をデザインする～

発行元：地域包括ケア病棟“彩り”・リハビリ科・地域医療連携室

地域包括ケア病棟広報誌Design号外34号です。表面は、第23回住民医療フォーラムの報告です。裏面は、嚥下評価目的入院のお知らせです。（地域医療連携室 室長 南出 弦）

第23回 住民医療フォーラムのご報告



10月17日（木）当院9階会議室におきまして、第23回住民医療フォーラムを開催いたしました。

今回の住民医療フォーラムは「山城南圏域でのリハビリテーション診療の充実を目指して」をテーマに、第一部は、ミニレクチャーとして京都第一赤十字病院リハビリテーション科池田巧先生から、「気になる食べる力の衰え」を演題にご講演頂き、特別講演では、京都府立医科大学リハビリテーション医学教室教授三上靖夫先生から「いつまでも元気で暮らすために」を演題にご講演頂きました。元気で過ごすためには、毎日の活動が大事で、寝たきりや安静状態では、どんどん筋肉が減り体力が失われる状況であることを、宇宙飛行士が経験する無重力空間などを例に、住民の皆さまにもわかりやすいようご説明頂きました。また先生のユーモアを交えたご講演は、会場からもたくさんの笑顔が溢れていました。



休憩をはさんだ第2部では、質問コーナーとして「みんなで考えようリハビリテーション」をテーマに三上教授・池田先生その他、当院整形外科吉田部長、当院リハビリ科岡村課長が回答者として、会場の皆さまからの質問にお答えさせて頂きました。会場からは、痛みのこと、日々の運動についてなど熱心な質問があり、皆さまのリハビリに関する関心の高さが伺えました。

当院では、来月（11月5日（火））も京都府立医科大学学長の竹中洋先生をお招きして「京都南部の医療展開～近未来の予測～」をテーマに、ご講演頂きます。全国各地で病院の役割分担の見直しや統廃合が進む中、京都府南部の医療の近未来について、大学の視点からわかりやすくお話しして頂く予定です。

地域住民の皆さま・関係機関の皆さまの多数のご参加をお待ちしておりますので、奮ってご参加頂きますようよろしくお願い致します。（地域医療推進部 副部長 中村 真史）



「山城ケア病棟」と検索下さい。

山城ケア病棟

検索



NEW

嚥下機能評価目的入院 3日間の入院コースが始まりました。

以前より、地域包括ケア病棟“彩り”では、嚥下機能評価を希望される患者さんを受け入れていています。「最近むせやすくなり心配…」「デイサービスの利用者さんの安全な食形態や姿勢を教えてください」等、ご本人やご家族、担当ケアマネジャーよりご依頼頂いています。これまでは7日間、11日間の入院コースのみでしたが、この度、3日間の入院コースを始めることになりました。

3日間の入院コースのメリットは、短期間で嚥下評価が行え、入院費用の負担も少なく、患者さんの予定に合わせやすい、というところです。(評価のみとなり、評価後の嚥下訓練は実施できません)。火曜日に入院して頂き、水曜日に嚥下内視鏡検査を実施します。嚥下内視鏡検査では、どのような食物だと飲み込みやすいのか(飲み込みにくいのか)、どの姿勢が誤嚥のリスクが少ないか等を評価します。そして、木曜日に退院となります。ご本人・ご家族がどのような食事を食べたい(食べさせたい)とお考えなのか、入院前に意向をお伺いした上での入院となりますので、実際に食べたいとお考えの食物を使用し、検査を実施することも可能です。

嚥下訓練もしっかりしてほしいという方には、今までどおり7日間、11日間の入院コースもありますので、入院希望のご連絡の際に担当にお伝えください。入院希望でなくとも、些細なことでもお気軽にお問合せください。(地域医療連携室 ソーシャルワーカー 中野 明子)



地域医療連携室より

～ 若年性認知症フォーラムに参加して ～

10月13日(日)、木津川市のいずみホールで「若年性認知症フォーラム」が開催されました。毎年、京都府山城南保健所と当院(認知症疾患医療センター)が共催で研修会を開催していますが、今年は若年性認知症の当事者の方に登壇頂きました。地域の専門職だけでなく、認知症の患者さんやご家族の参加もありました。

当院岩本副院長による講演の後、「不安の中へ～手探りの新学期～」と題して、若年性認知症当事者の横田宏之さんによる講演が始まりました。サポート役として、横田さんが利用されているデイサービスkumiki(くみき)の管理者藤田さんも一緒に登壇されました。

横田さんは大学卒業後、長年にわたり中学校教諭をしておられましたが、数年前に認知症の診断を受けられました。家庭訪問の際、生徒の自宅への行き方がわからなくなり約束の時間に間に合わなかったことなど、仕事上でのミスが出始めた発症当時のことについてありのままに語って下さいました。また、現在のどうしようもない不安や苛立ちについてご自分の言葉で語って下さり、私を含めた会場にいたすべての人の心に響くものでした。そして、中学校の教師をしていた日々が愛おしく、今からすぐにでも中学校に行ってできることであれば何か手伝いができればとおっしゃっていたこと、その一方で、受け止めなければならない(中学校教諭には戻れないという)現実に向き合わないといけないとおっしゃっていたことが大変印象的でした。

講演の中で横田さんは、認知症の人への理解が“豊か”に広がる社会になれば、と力強く話して下さいました。横田さんが教えてくださった“豊か”という意味を自分自身の中で理解し、今後も認知症の患者さんの支援をしていきたいと思えます。(地域医療連携室 室長 南出 弦)